

小川恒男

はしがき

本稿には『樂府詩集』卷二十一・横吹曲辞一「入関」一首、「出塞」四首を収めた。「入関」は梁の呉均の作。「出塞」は無名氏の作一首、梁の劉孝標、北周の王褒、隋の楊素の作それぞれ一首ずつである。

『樂府詩集』は楊素の「出塞」を一首しか収載しない。楊素の作の次には薛道衡「出塞」二首、虞世基「出塞」二首を載せる。『古詩紀』などは薛道衡・虞世基の作を楊素の「出塞」に和したものとす。事実、『古詩紀』には薛道衡・虞世基らの「出塞」計六首はまとめて訳注を作成した方がよかつたのだが、雑務に追われ残念ながら間に合わせられなかつた。次の訳注に回したい。

底本はこれまでと同様に中国古典文学基本叢書『樂府詩集』（中華書局 一九七九）である。

梁・呉均「入関」

【本文及び書き下し】

1 羽檄起辺庭 羽檄 辺庭より起こり

無異同。

【押韻】

「庭」「蚩」「星」、下平十五青韻。「城」「傾」、下平十四清韻。『広韻』、青韻独用。

【作者】

四六九く五二〇。呉興の人。字は叔庠。寒門の出であるが、好学俊才を沈約に認められ、天監（梁武帝、五〇二く五一九）の初め、柳惲に召されて主簿となつた。のち建安王蕭偉のもとで記室・国侍郎などの職につき、奉朝請で終つた。『齊春秋』を著わしたが、武帝に「其書不実」と責められ、免職されることがあつた。後、勅命により『通史』を作ろうとしたが、未完成的のまま普通元年に卒した。

当時、彼の詩を模倣する者が多く、「呉均体」と称された。作品にはしばしば游侠への憧憬や自らの不遇感が描かれる。『梁書』卷四十九・文学伝上、『南史』卷七十二・文学伝。

【語釈】

0 入関

「入関」『樂府詩集』卷二十一・漢横吹曲一の解題に『樂府解題』曰、「漢横吹曲、二十八解、李延年造。魏晉已来、唯伝十曲。一曰『黄鵠』、二曰『隴頭』、三曰『出関』、四曰『入関』、五曰『出塞』、

- | | |
|---------|----------------|
| 2 烽火乱如蚩 | 烽火 乱ること蚩の如し |
| 3 是時張博望 | 是の時 張博望 |
| 4 夜赴交河城 | 夜 交河城に赴く |
| 5 馬頭要落日 | 馬頭 落日を要へ |
| 6 劍尾掣流星 | 劍尾 流星を掣く |
| 7 君恩未得報 | 「君恩 未だ報いるを得ざれば |
| 8 何論身命傾 | 何ぞ論ぜん 身命の傾くを」 |

【日本語訳】

- 1 緊急の知らせが辺境から届き
- 2 烽火が蚩のように次から次へと舞う
- 3 その時、かの張騫は
- 4 夜陰に乗じて交河城へと駆け付けた
- 5 馬の頭は沈む夕日を受け
- 6 劍の先には流星がひらめく
- 7 「君の御恩にはまだむくいておらぬ
- 8 この身が減びることなど取るに足らぬ」と

【校勘】

〇『古詩紀』卷九十一

六曰『入塞』、七曰『折楊柳』、八曰『黄覃子』、九曰『赤之揚』、十曰『望行人』。

『樂府解題』に曰く、「漢横吹曲、二十八解、李延年 造る。魏晉已来、唯だ十曲を伝ふるのみ。一に曰く『黄鵠』、二に曰く『隴頭』、三に曰く『出関』、四に曰く『入関』、五に曰く『出塞』、六に曰く『入塞』、七に曰く『折楊柳』、八に曰く『黄覃子』、九に曰く『赤之揚』、十に曰く『望行人』。」と。

とあるが、六朝詩人の作としては呉均のこの作を収めるだけである。

1 羽檄起辺庭 2 烽火乱如蚩

「羽檄起辺庭」宋・鮑照「出自薊北門行」（『文選』卷二十八）に「羽檄起辺亭、烽火入咸陽（羽檄 辺亭に起こり、烽火 咸陽に入る）」と類似句が見える。「羽檄」は羽根飾りで緊急であることを示した文書。魏・曹植「白馬篇」（『文選』卷二十七）に「羽檄従北来、厲馬登高堤（羽檄 北より来たり、馬を厲まして高堤に登る）」。「辺庭」は辺境の異国の朝廷、転じて辺境地帯の意。梁・王訓「度関山」に「辺庭多警急、羽檄未會閑（辺庭 警急多く、羽檄 未だ會て閑ならず）」。

「烽火」のろし。右に引いた鮑照「出自薊北門行」に見える。李善注は『史記』周本紀に「有寇至則举烽火。（寇の至る有れば則ち烽火を举ぐ。）」とあるの

を引く。

「乱如蚩」蚩のようにむやみに飛び交う。梁・簡文帝蕭綱「秋閨夜思詩」(『玉台』卷七)に「初霜貫細葉、秋風驅乱蚩(初霜 細葉を貫とし、秋風 乱蚩を驅る)」。

3 是時張博望 4 夜赴交河城

「張博望」張騫(？〜前一一四)。月氏との匈奴挾撃を圖つた武帝に応じ、使者として前一三九年頃長安を出発したが、途中匈奴の捕虜となり、約十年の間そのまま抑留された。脱出して大宛(フェルガナ)に至るが、月氏との同盟は成らなかつた。帰国の途中、またも匈奴に捕らえられたが、内乱に乗じて前一二六年に帰国した。前一二三年、大將軍衛青の遠征軍に従い、その功で博望侯に封じられた。晋・潘岳「西征賦」(『文選』卷十)に「銜使則蘇属国、震遠則張博望。(使ひを銜むは則ち蘇属国、遠きを震はすは則ち張博望。)」とあり、李善注は『漢書』を引いて「張騫、漢中人也。以郎扈募、使月氏、去十三年、得還。騫以校尉從大將軍擊匈奴、知水草処、軍得以不乏。封騫為博望侯。(張騫、漢中の人なり。郎を以て募に応じ、月氏に使ひして、去ること十三年、還るを得たり。騫 校尉を以て大將軍の匈奴を撃つに従ひ、水草の処を知り、軍 以て乏しからざるを得。騫を封じて博望侯と為す。)」という。「交河城」都市の名。新疆ウイグル自治区吐魯番(ト

ルファン)市の西、約一〇キロのところにあつた。『漢書』西域伝下に「車師前国、王治交河城。河水分流繞城下、故号交河。(車師前国、王の治 交河城。河水 分流して城下を繞り、故に交河と号す。)」。梁・范雲「効古」詩(『文選』卷三十一)に「風断陰山樹、霧失交河城(風は断つ 陰山の樹、霧に失ふ 交河の城)」。

5 馬頭要落日 6 劍尾掣流星

「要落日」沈む夕日の光を迎え受ける。馬が西に向いている。

「劍尾」劍先。六朝詩には他の用例は見当たらない。「掣流星」流れ星のようにキラリと光る。「掣」、ひく。齊・孔稚珪「白馬篇」に「雄戟摩白日、長劍断流星(雄戟 白日を摩し、長劍 流星を断つ)」。

7 君恩未得報 8 何論身命價

「君恩」君主の恩愛。吳均是「雉子斑」にも「死節報君恩、誰能孤恩眇(死節もて君恩に報いん、誰か能く恩眇に孤かんや)」とこの意味で用いるが、六朝詩では魏・曹植「浮萍篇」(『玉台』卷二)に「行云有返期、君恩儻中還(行云 返る期有り、君恩 儻しくは中ごろに還らん)」のように多くは「あなただけの恩情」の意で用いられる。

「未得報」相手の想いに答えられないでいる。晋・無名氏「歡聞」(『玉台』卷十)に「單身如蚩火、持

底報郎恩(單身 蚩火の如し、底なを持して郎の恩に報いん)」。『何論』問題とするに足りない。漢・辛延年「羽林郎詩」(『玉台』卷一)に「不惜紅羅裂、何論輕賤軀(紅羅の裂くるを惜しまず、何ぞ輕賤の軀を論ぜん)」。

「身命傾」身を滅ぼす。「身命」、生命の意。漢・崔駰「安侯侍詩」(『類聚』卷五十九)に「戎馬鳴兮金鼓震、壯士激兮忘身命(戎馬 鳴きて 金鼓 震へ、壯士 激して 身命を忘る)」。

無名氏「出塞」

- 【本文及び書き下し】
- 1 候騎出甘泉 候騎 甘泉に出で
 - 2 奔命入居延 奔命して 居延に入る
 - 3 旗作浮雲影 旗 浮雲の影と作り
 - 4 陣如明月弦 陣 明月の弦の如し

【日本語訳】

- 1 匈奴の斥候の騎兵が甘泉にまで姿を現し
- 2 我が軍は下命に応じて居延に駆け付けようとする
- 3 我が軍の旗は浮雲の影のようにひるがえり
- 4 我が軍の陣は明るい半月のような形になっている

【校勘】

○『古詩紀』卷百四十・『古樂府』(元・左克明)卷

三・『古樂苑』(明・梅鼎祚)卷十二

0 『詩紀』収「隋附録第一、樂府失載名氏」。『古樂府』『古樂苑』並作「古辞」。

【押韻】

「泉」「延」、下平二仙韻。「弦」、下平一先韻。先・仙同用。

【語釈】

0 出塞 郭茂倩の題解は、

『晋書』樂志曰、「『出塞』『入塞』曲、李延年造」。曹嘉之『晋書』曰、「劉疇嘗避乱塢壁、賈胡百數欲害之、疇無懼色、援笳而吹之、為『出塞』『入塞』之声、以動其遊客之思、於是群胡皆垂泣而去」。

按『西京雜記』曰、「戚夫人善歌『出塞』『入塞』『望歸』之曲」。則高帝時已有之、疑不起於延年也。唐又有「塞上」「塞下」曲、蓋出於此。

『晋書』樂志に曰く、「『出塞』『入塞』の曲、李延年 造る」と。曹嘉之『晋書』に曰く、「劉疇 嘗て乱を塢壁に避け、賈胡 百數 之れを害せんと欲するも、疇 懼るる色無く、笳を援りて之れを吹き、『出塞』『入塞』の声を為して、以て其の遊客の思ひを動かせば、是に於いて群胡 皆な泣を垂れて去る」と。

按ずるに『西京雜記』に曰く、「戚夫人 善く

『出塞』『入塞』『望歸』の曲を歌ふ」と。則ち高帝の時 已に之れ有り、疑ふらくは延年より起こらざるならん。

唐に又た「塞上」「塞下」曲有り、蓋し此れより出でしならん。

という。

また韓寧氏『鼓吹横吹曲辞研究』（北京大学出版社 二〇〇九）は「郭茂倩在這首曲辞下未注明作者、元左克明的『古楽府』和明梅鼎祚の『古楽苑』都標為『古辞』。那麼、這首曲辞是不是一首漢代的古辞呢？」（郭茂倩はこの曲辞で作者を明記しないが、元・左克明の『古楽府』と明・梅鼎祚の『古楽苑』とはいずれも『古辞』とする。では、この曲辞は漢代の古辞なのだろうか。…）として、左にも引く『史記』匈奴列伝の記事によつて、この「出塞」が漢の文帝の時の匈奴による大規模な侵入を描いたものであるとするが、「但是、還不能因此而断定這首古辞就是西漢李延年之前或是同時期的作品。理由有二、首先、匈奴入侵之事漢以後任何朝代的詩人都可以写、不一定非要由漢人来写。其次、也是比較重要的一点、這首古辞在写作方式上不似西漢的作品。…。郭茂倩在『樂府詩集』中并未標明是『古辞』、說明他對之也是有疑問的。（だが、このことからこの古辞が前漢の李延年の前、或いは同時期の作品であるとはやはり断定できない。理由は二つあり、ひとつ

は匈奴が攻め込んだという事実は漢以後のどの時代の詩人でも書けるので、漢人によつてでなければ書けないとは限らないことである。次に、やはりやや重要な点であるが、この古辞が創作方法の面で前漢の作品に似ていないことである。…。郭茂倩が『樂府詩集』で『古辞』であることを明記していないのは、彼もまたそれについて疑問を持っていたからなのだ。」と結論付ける。

1 候騎出甘泉 2 奔命入居延

「候騎」偵察を任務とする騎兵。『史記』匈奴列伝に「漢孝文帝十四年、匈奴单于十四万騎入朝那・蕭關、殺北地都尉印、虜人民畜産甚多、遂至彭陽。使奇兵入烧回中宮、候騎至雍甘泉。（漢の孝文帝十四年、匈奴の单于 十四万騎 朝那・蕭關に入り、北地都尉印を殺し、人民畜産を虜にすること甚だ多く、遂に彭陽に至る。奇兵をして入りて回中宮を焼かしめ、候騎 雍の甘泉に至る。）とあり、『索隱』は「崔浩云、『候、邏騎』。（崔浩 云ふ、『候、邏騎なり』。）とする。詩では梁・何遜「見征人分別」詩に「候騎出蕭關、追兵赴馬邑（候騎 蕭關を出で、追兵 馬邑に赴く）」。

「甘泉」陝西省咸陽市淳化県の甘泉山。秦の時、ここに甘泉宮を築き、漢の武帝が増築した。『史記』秦始皇本紀に「韓非使秦、秦用李斯謀留非、非死雲陽。（韓非 秦に使ひし、秦 李斯の謀を用ひて非を留

め、非 雲陽に死す。）とあり、『正義』は『括地志』を引いて「雲陽城在雍州雲陽県西八十里、秦始皇甘泉宮在焉。（雲陽城 雍州雲陽県の西八十里に在り、秦始皇の甘泉宮 焉に在り。）という。

「奔命」命令に応じて忙しく動き回る事。『左伝』成公七年に「爾以讒慝貪林事君、而多殺不辜。余必使爾罷於奔命以死。（爾 讒慝貪林を以て君に事へて、多く不辜を殺す。余 必ず爾をして奔命に罷れて以て死せしめん。）と。

「居延」居延海。内モンゴル自治区の西部にある塩湖。シルクロード上の要衝の地。『史記』李將軍列伝に「李陵既壯、選為建章監、監諸騎。善射、愛士卒。天子以為李氏世將、而使將八百騎。嘗深入匈奴二千余里、過居延視地形、無所見虜而還。（李陵 既に壯し、選ばれて建章監と為り、諸騎を監す。射を善くし、士卒を愛す。天子 以て李氏の世將と為して、八百騎に將たらしむ。嘗て深く匈奴に入ること二千余里、居延を過ぎ地形を視て、虜を見る所無くして還る。）とあり、『正義』に『括地志』云、「居延海在甘州張掖県東北六十四里。（『括地志』に云ふ、『居延海 甘州張掖県の東北六十四里に在り』と。）とある。

3 旗作浮雲影 4 陣如明月弦

「浮雲影」ひるがえる旗の影が浮雲の影のように見える。陳・蔡君知「君馬黃」に「足策浮雲影、珂連明月

光（足は策たる 浮雲の影、珂は連なる 明月の光）」と。

「明月弦」急行する軍の陣形が明るい半月の形になる。弦は円周上の二点を結んだ線分。梁・劉孝先「春宵詩」に「夜樓明月弦、露下百花鮮（夜樓 明月の弦、露 下りて 百花 鮮かなり）」。

梁・劉孝標「出塞」

- 【本文及び書き下し】
- 1 薊門秋氣清 薊門 秋氣 清く
 - 2 飛將出長城 飛將 長城を出づ
 - 3 絶漠衝風急 絶漠 衝風 急に
 - 4 交河夜月明 交河 夜月 明るし
 - 5 陷敵摧金鼓 敵を陥れて 金鼓を摧ち
 - 6 摧鋒揚旆旌 鋒を摧きて 旆旌を揚ぐ
 - 7 去去無終極 去り去るも 終極無く
 - 8 日暮動邊聲 日暮 邊聲動く

【日本語訳】

- 1 薊門で秋の気配が清らかで次第に寒さがつのる頃
- 2 漢の飛將軍が万里の長城から出陣される
- 3 沙漠を横切ろうとすると突風がサツと吹き抜け
- 4 交河では夜の月が明々と照らす
- 5 かねを打ち鳴らして敵陣に突入し
- 6 旗や幟をかざして敵の鋭気を挫く
- 7 けれど、辺塞を離れて進んでも進んでも果てしなく

8 今日の日暮れにもまた辺境ならではの音が湧き上がる

○『文苑英華』卷百九十七・『古詩紀』卷百無異同。

【押韻】

「清」「城」「明」、下平十五青韻。「旌」「声」、下平十四清韻。『広韻』、青韻独用。

【作者】

劉峻（四六二～五二一）、字は孝標、平原（山東省平原県）の人。『世説新語』注で知られる。『梁書』『南史』に伝がある。

【語釈】

1 薊門秋氣清 2 飛將出長城

「薊門」地名。今の北京市周辺。『樂府詩集』卷六十一・雜曲歌辭・鮑照「出自薊北門行」（『文選』卷二十八作「代出自薊北門行」）の題解に、魏曹植「艷歌行」曰、「出自薊北門、遙望胡地桑。枝枝自相值、葉葉自相當」。『樂府解題』曰、「出自薊北門行」、其致与『從軍行』同、而兼言燕薊風物、及突騎勇悍之状。若鮑照云『羽檄起辺亭』、備叙征戰苦辛之意。」

魏の曹植の「艷歌行」に曰く、「出づるに薊北の門よりし、遙かに胡地の桑を望む。枝枝自ら相ひ値ひ、葉葉自ら相ひ当たる」と。『樂府解題』に曰く、「出自薊北門行」、其の致き『從軍行』と同じくして、兼ねて燕薊の風物、及びに突騎の勇悍の状を言ふ。鮑照の『羽檄 辺亭に起こる』と云ふが若きは、備さに征戰苦辛の意を叙す。」と。

とあり、「薊門」の語は辺塞のイメージを伴う。「秋氣」秋の厳しい気配。『漢書』外戚伝上・孝武李夫人に「秋氣潛以淒淚兮、桂枝落而銷亡。（秋氣 潛として以て淒淚たり、桂枝 落ちて 銷亡す。）」。「潜」、顔師古注に「慳、音千感反。」と。

「飛將」飛將軍。漢の將軍である李広を匈奴が恐れて「飛將軍」と呼んだ。『史記』李將軍列伝に「広居右北平、匈奴聞之、号曰『漢之飛將軍』、避之数歳、不敢入右北平。（広の右北平に居るや、匈奴之れを聞き、号して『漢の飛將軍』と曰ひ、之れを避くこと数歳、敢へて右北平に入らず。）」と。右北平は河北省、遼寧省、内モンゴル自治区が交差する辺り。第1句「薊門」の地に相当する。

「長城」万里の長城。梁・虞羲「詠霍將軍北伐」詩（『文選』卷二十一）に「擁旄為漢將、汗馬出長城（旄を擁して漢の將と為り、馬に汗して長城を出づ）」。

3 絶漠衝風急 4 交河夜月明

「絶漠」沙漠を横切る。絶幕とも。『漢書』武帝紀に「（元朔六年）夏四月衛青復將六將軍絶幕、大克獲。（夏四月 衛青 復た六將軍を將めて幕を絶り、大いに克獲す。）」とあり、顔師古注に「応劭曰、『幕、沙幕、匈奴之南界也』。臣瓚曰、『沙土曰幕、直度曰絶』。（応劭 曰く、『幕は、沙幕、匈奴の南界なり』と。臣瓚 曰く、『沙土を幕と曰ひ、直ちに度るを絶と曰ふ』と。）」。

「衝風」猛烈な風。『楚辭』九歌・河伯に「与女遊兮九河、衝風起兮橫波（女と九河に遊ばんとすれば、衝風 起りて 波を横たふ）」。

「交河」梁・吳均「入關」第4句「夜赴交河城」語釈参照。

「夜月」夜の月。宋・鮑照「中興歌」十首其三に「碧樓含夜月、紫殿爭朝光（碧樓 夜月を含み、紫殿 朝光を争ふ）」。

5 陷敵攢金鼓 6 摧鋒揚旆旌

「陷敵」敵陣に突入する。『後漢書』公孫述伝に「跨馬陷敵、所向輒平。（馬に跨がり敵を陥れ、向かふ所 輒ち平らぐ。）」と。

「攢金鼓」太鼓に形の似たかねを打ち鳴らす。漢・司馬相如「子虛賦」（『文選』卷七、『漢書』司馬相如伝上）に「攢金鼓、吹鳴籥。（金鼓を攢ち、鳴籥を吹く。）」とあり、郭璞注に「韋昭曰、『攢、擊也』。（韋昭 曰く、『攢、擊なり』と。）」。顔師古注は

「金鼓謂鉦也。（金鼓 鉦を謂ふなり。）」とし、王先謙『補注』に「鉦、鏡也。其形似鼓、故名金鼓。（鉦、鏡なり。其の形 鼓に似る、故に金鼓と名づく。）」という。

「摧鋒」敵軍の鋭気を挫く。梁・簡文帝「雁門太守行」三首其二に「潜師夜接戰、略地曉摧鋒（師を潜めて 夜 接戦し、地を略して 曉 鋒を挫く。）」。「揚旆旌」旗や幟を高く掲げる。晋・陸機「贈顧交阯公真」に「伐鼓五嶺表、揚旌万里外（鼓を伐つ 五嶺の表、旌を揚ぐ 万里の外。）」。

7 去去無終極 8 日暮動辺声

「去去」ここから遠く立ち去る。漢・蘇武「詩」四首（『文選』卷二十九、『玉台』卷一）其三に「參辰皆已没、去去從此辭（參辰 皆な已に没し、去り去りて 此より辞せん。）」。

「無終極」終わりが無い。果てしない。魏・曹植「送応氏」詩（『文選』卷二十）二首其二に「天地無終極、人命若朝霜（天地 終極無く、人命 朝霜の若し。）」。

「辺声」遊牧民族の楽器が奏でる音楽や馬の嘶きなど辺境の地で聞こえる様々な音。漢・李陵「答蘇武書」（『文選』卷四十一）に「吟嘯成群、辺声四起（吟嘯 群れを成し、辺声 四もに起こる。）」とあり、呂向注に「笳曲馬鳴鼓吹之属。」という。

周・王褒「出塞」

【本文及び書き下し】

- 1 飛蓬似征客 飛蓬 征客に似
- 2 千里自長驅 千里 自ら長驅す
- 3 塞禽唯有雁 塞禽は唯だ雁有るのみ
- 4 関樹但生榆 関樹は但だ榆を生ずるのみ
- 5 背山看故壘 山を背にして故壘を看
- 6 繫馬識余蒲 馬を繫ぎて余蒲を識る
- 7 還因麾下騎 還た麾下の騎に因り
- 8 来送月支図 来たりて月支の図を送らしめん

【日本語訳】

- 1 風に舞うヨモギは旅人に似て
- 2 千里の彼方へとひとりでに転がり続ける
- 3 辺塞の鳥は雁がいるだけ
- 4 国境の樹は榆が生えているばかり
- 5 山を背にしては古い砦を眺め
- 6 馬を繫いで始皇帝の時から残る蒲を見分ける
- 7 どうか漢の李陵と同じように旗本の騎兵に
- 8 月支の地形を描いた図を持ち帰ってもらいたい

【校勘】

- 『文苑英華』巻百九十七・『古詩紀』巻百二十三・『漢魏六朝百三家集』
- 「出塞」、『詩紀』『百三家集』並題下注云「一作『塞下曲』」。

。類たり 此の遊客の子の、軀を捐てて遠く戎に従ふに」とヨモギを征客に喩える。

「征客」旅人。宋・鮑照「和王義興七夕」詩に「寒機思婦婦、秋堂泣征客（寒機 婦婦を思ひ、秋堂 征客を泣く）」。

「長驅」遠くまで走り抜ける。『戦国策』斉策に「長驅到齊。（長驅して齊に到る。）」とあり、また曹植「白馬篇」（『文選』巻二十七）に「長驅蹈匈奴、左顧凌鮮卑（長驅して匈奴を蹈み、左顧して鮮卑を凌ぐ）」。

3 塞禽唯有雁 4 関樹但生榆

「塞禽」辺塞に生息する鳥。梁・柳惲「贈吳均」詩二首其二「颯颯避霜葉、離離山塞禽（颯颯たり 霜を避くるの葉、離離たり 山塞の禽）」。

「雁」佐藤保氏『漢詩のイメージ』（大修館書店 一九九二）に「秋の訪れとともに北から飛んで来て、過ぎゆく春とともに北に帰って行く雁は、中国の渡り鳥の代表である。雁とまったく逆の動きをする燕とともに、季節の移り変わりを人びとに知らせる候鳥―時候の変化とともに移り動く鳥―である。」とある。北辺の地では秋の訪れとともに南に飛んで行き、過ぎゆく春とともに南から帰って来ることとなる。魏・曹操「却東西門行」に「鴻雁出塞北、乃在無人郷。挙翅万里余、行止自成行。冬節食南稻、春日復北翔（鴻雁 塞北に出で、乃ち無人の郷に在り。

【押韻】

「驅」「榆」、上平十虞韻。「蒲」「図」、上平十一模韻。虞・模同用。

【作者】

五一三？～五七六？。字は子淵、琅邪臨沂（山東省臨沂市）の人。梁の武帝はその才能を愛し、弟の潘陽王蕭恢の娘と娶せた。元帝の時には吏部尚書・左僕射に任じられた。承聖三（五五四）年、西魏の軍が江陵を陥落させると、降伏して長安に至る。庾信と並び称され、北朝でも優遇された。陳と北周とが和睦すると多くの南朝出身の文人が南方に帰ったが、庾信と王褒だけは帰ることができなかった。

梁にいた頃は華麗な詩風であったが、北朝に入ってから関塞を描いた詩を多く残した。『周書』『北史』『梁書』に伝がある。

【語釈】

1 飛蓬似征客 2 千里自長驅

「飛蓬」枯れた後、根が切れて風に吹き飛ばされたヨモギ。『詩経』衛風・伯兮に「自伯之東、首如飛蓬（伯の東してより、首 飛蓬の如し）」。また魏・曹植「雜詩」六首（『文選』巻二十九）其二は「轉蓬離本根、飄颻隨長風。…類此遊客子、捐軀遠從戎（転蓬 本根を離れ、飄颻として長風に随ふ。

翅を挙ぐること万里余、行止 自ら行を成す。冬節に南稻を食らひ、春日に復た北翔す」と。

「関樹」辺塞の地に生えている樹木。梁・沈約「有所思」（『玉台』巻五）に「関樹抽紫葉、塞草發青芽（関樹 紫葉抽き、塞草 青芽発く）」。

「榆」ニレ。落葉高木。『漢書』韓安国伝に「累石為城、樹榆為塞。（石を累ねて城と為し、榆を樹えて塞と為す）」。

5 背山看故壘 6 繫馬識余蒲

「背山」山を背後に置く。後漢・繁欽「与魏文帝牋」（『文選』巻四十）に「背山臨谿、流泉東逝。（山を背にし谿に臨めば、流泉 東逝す）」。

「故壘」古い砦。魏明帝曹叡「苦寒行」五解其二に「顧觀故壘処、皇祖之所嘗（顧みて故壘の処を觀れば、皇祖の嘗む所なり）」。

「繫馬」馬の手綱を繫ぎ止める。晋・劉琨「扶風歌」（『文選』巻二十八）に「繫馬長松下、發鞍高岳頭（馬を長松の下に繫ぎ、鞍を高岳の頭に発す）」。「余蒲」今でも残っているガマ。『芸文類聚』巻六十引『三齊略記』に「城東南五十里、有蒲台。高八十丈。秦始皇所頓處。時在台下繫蒲繫馬、夾道數百步。到今蒲生猶繁。蒲似水楊而勁。堪為箭也。（城の東南五十里に、蒲台有り。高さ八十丈。秦始皇の頓る所の処なり。時に台下に在りて蒲を繫ひて馬を繫ぎ、道を夾むこと數百歩。今に到るも 蒲

生じて猶ほ縈るがごとし。蒲 水楊に似て勁し。箭をるに堪ふなり也。」と見える故事に拠る。蒲台は現在の山東省浜州市。

7 還因麾下騎 8 來送月支圖

〔還因〕もう一度を頼みにして。梁・鮑泉「詠梅花」詩に「乍隨纖手去、還因插鬢來（乍ち纖手に随ひて去り、還た鬢に挿すに因りて來たる）」。

〔麾下〕將軍直屬の部下。「麾下」は作戰を指揮するための旗。二句、『漢書』李陵伝に「陵於是將其步卒五千人出居延、北行三十日、至浚稽山止營、拳圖所過山川地形、使麾下騎陳步樂還以聞。步樂召見、道陵將率得士死力。上甚說、拜步樂為郎。（陵 是に於いて其の步卒五千人を將ゐて居延を出で、北行すること三十日、浚稽山に至りて止營し、挙げて所過ぐる所の山川の地形を圖き、麾下の騎 陳步樂をして還りて以て聞こえしむ。步樂 召見せられ、陵 將率して士の死力を得たるを道ふ。上 甚だ説び、步樂を拜して郎と為す。）」とあるのに拠る。

〔月支圖〕月支の地形が描かれた圖。右に引いた『漢書』李陵伝参照。「月支」、月氏とも。秦から漢にかけて中央アジアで活躍した遊牧民族。

隋・楊素「出塞」

1 漠南胡未空 漠南 胡 未だ空しからず

〔本文及び書き下し〕

- 6 衛青は強い風に助けられた
- 7 厚く積み重なった雲が竹の間垣の辺りに漂い
- 8 半円形の日暈が匈奴のいる龍城の白虹を包む
- 9 漢の將軍たちは遙か彼方の地を自在に走り回り
- 10 遊牧民族の命運はほとんど尽きてしまった
- 11 不吉な彗星が姿を消して武器を地面に横たえ
- 12 月の暈が消えて身体の震えが収まった
- 13 立派な鍋はあっても夜回りに使うことはなくなり
- 14 赤牛の角製の弓を鳴らすこともなくなつた
- 15 胡馬が冷たい北風に向かつて嘶き
- 16 北方や西方の地に降りた霜が辺塞の辺りに棲む雁をすっぽり覆う
- 17 盛んな世が訪れ人の踏むべき道が辺塞の地に届き
- 18 文明の及ばぬ僻遠の地でも日用品が同じになつた
- 19 ちやうど都長安の邸宅が完成したところ
- 20 天子に謁見するため建章宮にやつて來られる

【校勘】

- 『文苑英華』卷百九十七・『古詩紀』卷百三十一・『古樂苑』卷十二
- 「出塞」、『詩紀』題下注云、「薛道衡・虞世基和詩別見」。
- 『英華』『詩紀』『古樂苑』並作「出塞二首」。
- 「雲橫虎落陣」、「英華」作「橫落陣氣」。
- 「氣抱龍城虹」、「英華」作「抱龍繞城虹」。
- 「幽荒日用同」、「古樂苑」注云「一作『幽荒日照同』」。

- 2 漢將復臨戎 漢將 復た戎に臨む
- 3 飛狐出塞北 飛狐より塞北に出で
- 4 碣石指遼東 碣石 遼東を指す
- 5 冠軍臨瀚海 冠軍 瀚海に臨み
- 6 長平翼大風 長平 大風に翼けらる
- 7 雲橫虎落陣 雲は横たはる 虎落の陣
- 8 氣抱龍城虹 氣は抱く 龍城の虹
- 9 橫行万里外 橫行す 万里の外
- 10 胡運百年窮 胡運 百年 窮まる
- 11 兵寢星芒落 兵は寢みて 星芒 落ち
- 12 戰解月輪空 戰きは解きて 月輪 空し
- 13 敵鏹息夜斗 敵鏹 夜斗息み
- 14 駢角罷鳴弓 駢角 鳴弓罷む
- 15 北風嘶朔馬 北風 朔馬嘶き
- 16 胡霜切塞鴻 胡霜 塞鴻に切なり
- 17 休明大道暨 休明 大道 暨り
- 18 幽荒日用同 幽荒 日用 同じくす
- 19 方就長安邸 方に長安の邸を就し
- 20 來謁建章宮 來たりて建章宮に謁す

【日本語訳】

- 1 ゴビ砂漠の南では遊牧民族がまだ消え去らず
- 2 漢の將軍がまたもや出陣することになった
- 3 飛狐からは北辺の地へ侵出し
- 4 碣石からは遼東を目指して進んでいく
- 5 霍去病は瀚海を見下ろし

【押韻】

「空」「戎」「東」「風」「虹」「窮」「空」「弓」「鴻」「同」「宮」、上平一東韻。

【作者】

？六〇六。隋の政治家、軍人であり、文章にも優れていた。楊堅（隋の文帝）を助けて隋の建国に貢献し、晋王広（後、煬帝）とともに南朝陳の討伐に活躍した。上柱国・御史大夫などを歴任し、尚書右僕射に上ると政權を掌握するに至り、皇太子勇を廢し次男である広を擁立した。しかし、即位後の煬帝に遠ざけられ、失意の内に死んだ。

【語釈】

1 漠南胡未空 2 漢將復臨戎

〔漠南〕ゴビ沙漠の南の地域。『後漢書』烏桓伝に「（建武）二十二年、匈奴国乱、烏桓乘弱擊破之、匈奴転北徙数千里、漠南地空、帝乃以幣帛賂烏桓。（二十二年、匈奴 国 乱れ、烏桓 弱きに乗じて之れを擊破し、匈奴 北に転じて徙ること数千里、漠南 地 空しく、帝 乃ち幣帛を以て烏桓に賂ふ。）」とある。

〔胡未空〕北方の遊牧民族たちがまだ遠くに迫いやられていない。「未空」、右に引いた『後漢書』烏桓伝の「漠南地空」に基づく。

〔漢將〕中国の王朝の將軍。梁・虞羲「詠霍將軍北伐」詩（『文選』卷二十一）に「擁旄為漢將、汗馬出長城（旄を擁して漢の將と為り、馬に汗して長城を出づ）」。

〔臨戎〕出陣する、從軍する。梁・沈約「奉和竟陵王郡名詩」に「望都遊子懷、臨戎征馬倦（都を望んでは 遊子 懷ひ、戎に臨んでは 征馬 倦む）」。

3 飛狐出塞北 4 碣石指遼東

〔飛狐〕要塞の名。河北省保定市。河北と北方边境とを結ぶ要衝の地。『漢書』酈食其伝に「距飛狐之口、守白馬之津、以示諸侯形制之勢。（飛狐の口を距ぎ、白馬の津を守りて、以て諸侯に形制の勢ひを示す。）」とあり、顏師古注に「臣瓚曰、『飛狐在代郡西南』。（臣瓚 曰く、『飛狐 代郡の西南に在り』と。）」『史記』は「蜚狐」に作る。また、虞羲「詠霍將軍北伐」詩に「飛狐白日晚、滹海愁陰生（飛狐 白日 晩れ、滹海 愁陰 生ず）」。

〔塞北〕北辺の地。曹操「却東西門行」に「鴻雁出塞北、乃在無人郷（鴻雁 塞北に出で、乃ち無人の郷に在り）」。

〔碣石〕山名。所在については諸説あるが、河北省にあり、かつては海に面していたとされる。また、この山にあつた柱状の石も碣石と呼ばれる。『漢書』武帝紀に「行自泰山、復東巡海上、至碣石。（行 泰山より、復た東のかた海上を巡り、碣石に至る。）」

とある。曹操「步出夏門行」に「東臨碣石、以觀滄海（東のかた碣石に臨み、以て滄海を觀る）」。

〔遼東〕遼河の東側の地域。遼寧省の東部から南部にかけて。碣石山から渤海を隔てたところ。宋・袁淑「效古」詩（『文選』卷三十一）に「訊此倦遊士、本家自遼東（此の倦遊の士に訊ぬ、本と家は遼東に自り）」。

5 冠軍臨瀚海 6 長平翼大風

〔冠軍〕漢の霍去病をいう。対匈奴戦での軍功によつて冠軍侯に封ぜられたことから。『史記』衛將軍驃騎列伝に「於是天子曰、『剽姚校尉去病斬首虜二千二十八級、及相國・当戶、斬单于大父行籍若侯産、生捕季父羅姑比、再冠軍、以千六百戶封去病為冠軍侯』。（是に於いて天子 曰く、『剽姚校尉去病 斬首虜二千二十八級、相國・当戶に及び、单于の大父行籍若侯産を斬り、季父羅姑比を生捕し、再び軍に冠たり、千六百戸を以て去病を封じて冠軍侯と為す』と。）」とある。梁・吳均「辺城將」詩四首其一に「爾時始応募、來投霍冠軍（爾の時 始めて応募し、來たりて霍冠軍に投ず）」。

〔瀚海〕瀚海は翰海、瀚海とも表記され、中国西北部に広がる砂漠を指す。『漢書』衛青霍去病伝「登臨翰海」には「張晏曰、『登海辺山以望海也。……』」如淳曰、『翰海、北海名也。』（張晏 曰く、『海辺の山に登りて以て海を望むなり。……』と。如淳

曰く、『翰海、北海の名なり』と。）」との注がある。

これに対し、王先謙『漢書補注』は斉召南の「瀚海即大漠之別名、沙磧四際無涯、故謂之海。張晏・如淳直以大海北海解之、非也。本文明云『去病出代・右北平二千余里』、則其地正在大漠。安能及絶遠之北海哉。（瀚海は即ち大漠の別名にして、沙磧四際 涯無し、故に之れを海と謂ふ。張晏・如淳 直ちに大海・北海を以て之れを解するは、非なり。本文 明らかに『去病 代・右北平より出づること二千余里』と云ふ、則ち其の地は正に大漠に在り。安くんぞ能く絶遠の北海に及ばんや。）」との案語を引く。『史記』衛將軍驃騎列伝には「（霍去病）封狼居胥山、禪於姑衍、登臨翰海。（狼居胥山に封じ、姑衍に禪し、登りて翰海に臨む。）」とあり、新釈漢文大系『史記 十一』（青木五郎 明治書院 二〇〇四）は「〇臨翰海 山上から翰海を見下ろす。『翰海』は『瀚海』ともいい、(1)今のバイカル湖、(2)今の呼倫湖と貝爾湖、(3)今の達来諾爾湖、(4)ゴビ沙漠、(5)今の杭愛山（の音訳）などの諸説があつて決し難い。……ここは狼居胥山や姑衍山に登つて翰海を見下ろしたという意ではないか。」とする。

〔長平〕漢の衛青をいう。匈奴との戦いで功績を挙げ、官は大將軍に至り、長平侯に封ぜられたことから。『史記』外戚世家に「衛子夫已立為皇后。先是衛長君死、乃以衛青為將軍、擊胡有功、封為長平侯。（衛子夫 已に立ちて皇后と為る。是れに先んじて衛長

君 死し、乃ち衛青を以て將軍と為し、胡を撃ちて功有り、封じて長平侯と為す。）」と見える。また、梁・劉孝儀「從軍行」に「冠軍親挾射、長平自合圍（冠軍 親ら挾射し、長平 自ら合圍す）」と。〔翼大風〕強い風の力を借りる。漢・揚雄「解難」〔漢書〕揚雄伝下に「不階浮雲、翼疾風、虚舉而上升、則不能殼膠葛、騰九閎。（浮雲に階り、疾風に翼けられ、虚擧して上升せざれば、則ち膠葛を擡へて、九閎に騰る能はず。）」とある。「大風」は漢の高祖劉邦「大風歌」に「大風起兮雲飛揚（大風 起りて 雲 飛揚す）」とあるように時の勢いをいう。

7 雲橫虎落陣 8 氣抱龍城虹

〔雲橫〕厚く積み重なつた雲が陣の辺りに漂う。一句、「陣雲」の語から発想されたと思われる。「陣雲」は重厚な陣のような形の雲。梁・何遜「学古」詩三首其一に「陣雲横塞起、赤日下城圓（陣雲 塞に横たはりて起ち、赤日 城に下りて圓かなり）」。

〔虎落〕城塞を守るために作られた竹の間垣。『漢書』鼂錯伝に「要害之処、通川之道、調立城邑、毋下千家、為中周虎落。（要害の処、通川の道には、城邑を調立し、千家を下ることからしめ、中周の虎落を為る。）」とあり、顏師古は「虎落者、以竹篾相連遮落之也。（虎落は、竹篾を以て相ひ連ね之れを遮落するなり。）」と注する。また、何遜「学古」詩三首其一に「虎落夜方寝。魚麗曉復前（虎落 夜

「氣抱」太陽のまわりに半円形の日暈が現れる。古

代中国では太陽の近くに雲が現れる気象現象を「抱」と呼んだ。『漢書』天文志に「抱珥虹蜺。」とあり、顔師古注に「如淳曰、『…』。凡そ氣日上為冠為戴、在旁直對為珥、在旁如半環、向日為抱、向外為背。」

（如淳 曰く、『…』。凡そ氣の日の上を食するを冠と為し戴と為し、旁らに在りて直ちに對するを珥と為し、旁らに在りて半環の如く、日に向かふを抱と為し、外に向かふを背と為す」と。）とある。

「龍城」匈奴が集まって祭祀を行うところ。また転じて匈奴の意で用いられる。『漢書』匈奴伝上に「歳正月、諸長小会单于庭、祠。五月、大会龍城、祭其先・天地・鬼神。（歳正月、諸長 单于の庭に小会し、祠る。五月、龍城に大会し、其の先・天地・鬼神を祭る。）とある。また、梁簡文帝蕭綱「隴西行」三首其一に「月暈抱龍城、星流照馬邑（月暈 龍城を抱き、星流 馬邑を照らす）」とある。

「虹」ここは白虹をいうと解した。佐藤保氏『漢詩のイメージ』（大修館書店 一九九二）に「白霓、つまり『白虹』こそ不吉なニジの最たるものであることにふれておかなければならない。異常な事態の起こる前触れとして、『白虹 日を貫く』という現象が生じるのであるが、この白霓ニジはわれわれが太陽を背にして見るふつうのニジとは違って、太陽の周囲に現れるものようである。いかなれば

日暈（太陽のまわりにできるカサ）をさしている。」との説明がある。すると、右の「氣抱」と似た現象を意味することになる。『戦国策』魏策四に「夫専諸之刺王僚也、彗星襲月。聶政之刺韓傀也、白虹貫日。（夫れ専諸の王僚を刺すや、彗星 月を襲ふ。聶政の韓傀を刺すや、白虹 日を貫く。）」。

9 横行万里外 10 胡運百年窮

「横行」自在に行き来する。『史記』季布欒布列伝に「上將軍樊噲曰、『臣願得十萬衆、横行匈奴中。』（上將軍樊噲 曰く、『臣 願はくは十萬の衆を得て、匈奴の中に横行せんことを』と。）とあり、齊・孔稚珪「白馬篇」に「横行絶漠表、飲馬瀚海清（横行す 絶漠の表、馬に飲ふ 瀚海の清きに）」と。『万里外』遙か彼方の地。晋・陸機「贈顧交趾公真」詩（『文選』卷二十四）に「伐鼓五嶺表、揚旌万里外（鼓を五嶺の表に伐ち、旌を万里の外に揚ぐ）」とあり、李善注は『漢書』陳湯伝に「劉向上疏曰、『…』（甘延寿・陳湯）懸旌万里之外、揚威昆山之西。（劉向 上疏して曰く、『…』。旌を万里の外に懸け、威を昆山の西に揚ぐ。）」とあるのを引く。「胡運」遊牧民族の命運。『晋書』載記・石季龍下に「時沙門吳進言于季龍曰、『胡運將衰、晋當復興。宜苦役晋人以厭其氣。』（時 沙門吳進 季龍に言ひて曰く、『胡運 將に衰へんとし、晋 當に復た興るべし。宜しく晋人を苦役して以て其の氣を厭

ふべし』と。）」。

「百年窮」寿命が尽きる。宋・鮑照「代貧賤苦愁行」に「以此窮百年、不如還窳窳（此れを以て百年を窮め、窳窳に還るに如かず）」。

11 兵寢星芒落 12 戰解月輪空

「兵寢」武器が地面に置かれ横になる。転じて戦争が終息すること。『史記』匈奴列伝に「願寢兵休士卒養馬、除前事、復故約。（願はくは兵を寢め士卒を休め馬を養ひ、前事を除き、故約を復せん。）」とある。

「星芒落」兵乱の兆しである彗星が消え失せる。「星芒」、天空に彗星が出現すること。北周・庾信「奉報寄洛州」詩に「星芒一丈燄、月暈七重輪（星芒一丈の燄、月暈 七重の輪）」とあり、『晋書』天文志に「一曰彗星、所謂掃星。本類星、末類彗。小者数寸、長或竟天。見則兵起、大水。（一に曰く彗星、所謂掃星なり。本は星に類し、末は類彗に類す。小なる者 数寸、長きは或ひは天を竟む。見るとば則ち兵 起こり、大水あり。）」と見える。

「戰解」寒さや恐怖による震えがおさまる。晋・束皙「餅賦」に「充虚解戰、湯餅為最。（虚を充たし戰きを解くは、湯餅を最と為す。）」。

「月輪空」月にかかった暈が消える。「月輪」、通常は丸い月の意だが、ここは月の暈。右に引いた庾信の詩にも「月暈七重輪」と見え、これは『漢書』天

文志の「七年、月暈、困參・畢七重。占曰、『畢・昴間、天街也。街北、胡也。街南、中国也。昴為匈奴、參為趙、畢為辺兵。』是歳高皇帝自將兵擊匈奴、至平城、為冒頓单于所困、七日乃解。（七年、月に暈あり、參・畢を困むこと七重。占ひに曰く、『畢・昴の間、天街なり。街の北、胡なり。街の南、中国なり。昴を匈奴と為し、參を趙と為し、畢を辺兵と為す』と。是の歳 高皇帝 自ら兵を將みて匈奴を撃ち、平城に至りて、冒頓单于の困む所と為り、七日にして乃ち解く。）」に拠る。

13 敵鏹息夜斗 14 駢角罷鳴弓

「敵鏹」りっぱな銅製の鍋。「鏹」は「鏹斗」、三本脚で柄のある銅製の鍋。軍中で昼は炊事に用い、夜はたいて夜回りの道具とした。『史記』李將軍列伝に「不擊刁斗以自衛。（刁斗を撃ちて以て自ら衛らず。）」とあり、『集解』は「孟康曰、『以銅作鏹器、受一斗、昼炊飯食、夜擊持行、名曰刁斗。』（孟康 曰く、『銅を以て鏹器を作り、一斗を受け、昼は炊飯して食らひ、夜は撃ちて持行し、名づけて刁斗と曰ふ。』）」とする。

「夜斗」六朝詩では他の用例が見当たらない。「鏹斗」「刁斗」の語から夜回りの意で用いるのだろう。「駢角」赤牛の角。『論語』雍也に「子謂仲弓曰、『犁牛之子駢且角、雖欲勿用、山川其舍諸。』（子 仲弓を謂ひて曰く、『犁牛の子も駢くして且つ角あら

ば、用ふる勿からんと欲すと雖も、山川 其れ諸れを捨てんや』と。』と。
「鳴弓」よく鳴る弓。強い弓をいう。陳・徐陵「閩山月」二首其二に「將軍擁節起、戰士夜鳴弓（將軍節を擁して起ち、戰士 夜 弓を鳴らす）」。

15 北風嘶朔馬 16 胡霜切塞鴻

「北風」北から吹いて来る風。「古詩十九首」『文選』卷二十九) 其一に「胡馬依北風、越鳥巢南枝（胡馬は北風に依り、越鳥は南枝に巢くふ）」とある。「依」、『玉台』卷一は「嘶」に作る。

「朔馬」右の「胡馬」に同じく、西北方の遊牧民族が暮らす土地で産した馬。齊・謝朓「落日悵望」詩に「借問此何時、涼風懷朔馬（借問す 此れ何れの時ぞ、涼風 朔馬を懷はしむ）」。

「胡霜」遊牧民族の土地に降りた霜。宋・鮑照「出自薊北門行」（『文選』卷二十八）に「簫鼓流漢思、旌甲被胡霜（簫鼓 漢思を流し、旌甲 胡霜を被る）」。

「塞鴻」辺塞から飛来する雁。「鴻」は大型の雁。鮑照「代陳思王京洛篇」（『玉台』卷四作「代京雜篇」）に「春吹回白日、霜歌落塞鴻（春吹 白日を回らし、霜歌 塞鴻を落とす）」。

17 休明大道暨 18 幽荒日用同

「休明」盛んな世であることを褒め称える語。晋・謝

靈運「永初三年七月十六日之郡初發都」（『文選』卷二十六）に「生幸休明世、親蒙英達顧（生まれて休明の世に幸せられ、親しく英達の顧みるを蒙る）」。

「大道」人が踏み行うべき理想的な道理。『孟子』滕文公下に「立天下之正位、行天下之大道。（天下の正位に立ち、天下の大道を行ふ。）」。

「暨」および、いたる。「泊」に通じる。「幽荒」文明の及ばない僻遠の地。後漢・張衡「東京賦」（『文選』卷三）に「惠風広被、沢泊幽荒。（惠風 広く被り、沢 幽荒に泊ぶ。）」とあり、薛綜注に「幽荒、九州外、謂四夷也。（幽荒は、九州の外、四夷を謂ふなり。）」と。

「日用」毎日使用する。またその物。『易』繫辭伝上に「百姓日用而不知、故君子之道鮮矣。（百姓 日に用ひて知らず、故に君子の道は鮮し。）」。

19 方就長安邸 20 来謁建章宮

「方就」ちょうど完成したばかり。「就」は「成」。左の『漢書』郊祀志下を参照。

「長安邸」長安に置かれた諸侯の邸宅。漢の時、諸侯が都長安に朝した時に宿る住居。『漢書』文帝紀に「太尉勃乃跪上天子璽。代王謝曰、『至邸而議之』。（太尉勃（周勃） 乃ち 跪 きて天子の璽を 上る。代王 謝して曰く、『邸に至りて之れを議せん』と。）」とあり、顔師古注に「郡国朝宿之舍、在京

師者率名邸。（郡国 朝宿の舍、京師に在る者 率 ね邸と名づく。）」と。この詩の主人公が新たに諸侯に封じられたことを表す。

「建章宮」漢の長安の宮殿の名。『漢書』郊祀志下に「上還、以柏梁災故、受計甘泉。公孫卿曰、『黃帝就青靈台、十一日燒、黃帝乃治明庭。明庭、甘泉也』。方士多言古帝王有都甘泉者。其後天子又朝諸侯甘泉、甘泉作諸侯邸。勇之乃曰、『粵俗有火災、復起屋、必以大、用勝服之』。於是作建章宮、度為千門万戸。

（上 還り、柏梁の災ひの故を以て、計を甘泉に受く。公孫卿 曰く、『黃帝 青靈台を就すも、十二日にして燒け、黃帝 乃ち明庭に治む。明庭は、甘泉なり』と。方士 多く古への帝王の甘泉に都する者有るを言ふ。其の後 天子 又た諸侯を甘泉に朝せしめ、甘泉に諸侯の邸を作る。勇之 乃ち曰く、『粵の俗 火災有れば、復た屋を起つるに、必ず大なるを以てし、用て之れを勝服す』と。是に於いて建章宮を作り、度るに千門万戸為り。）」とあり、顔師古注に「就、成也。」と。

※本稿は平成二十七年科学研費基盤研究（〇）「言語実験の場としての六朝楽府に関する研究」（課題番号二六三七〇四一〇）の助成を受けたものである。